

---

# 平凡勇者の異世界冒険記

桃野アリス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

平凡勇者の異世界冒険記

### 【Zコード】

Z3384W

### 【作者名】

桃野アリス

### 【あらすじ】

どこにでもいる平凡な男子高校生、伊藤 翔（俺）はいつも通り登校し、授業をサボつて寝た。そして起きたら、そこは異世界、目の前には…超絶美少女！？　？？？　翔が奮闘するお話です。ご都合主義、チートな最強系、ハーレム要素が苦手な方はご注意ください。一話の長さを短くし、更新速度をあげております。内容加筆・修正にお気を付けください。

## 序章（前書き）

始めまして、桃野アリスです。  
ぜひ暇つぶしにでも読んでもらえればと思います。

9 / 9 修正しました。

## 序章

……………。じーだ、……………。

気付いたら木の小屋のベットで寝てました。

なんてバカな状況があるわけが…………。

待て待て、落ち着け落ち着け。

そ、う、こんな時はまずは状況判断からだ。

えー、わっさも言つた通り木の手作りっぽい小屋で、これまた手作りっぽいベット&その他の家具。

そして、俺が寝てるベットのわきには超絶美少女。

……小屋と家具には（とうあえず）田をつむり。しかし、何だこの子は。見たところ年か年上っぽいが、何ひとつても可愛い。そ、う、可愛いのだ。

このレベルの子は、クラス、学校どころか県でもそ、ほほ届ないんじやないか？

黒髪黒眼のストレートヘアで、黒絲のベッドに寝てる姿は、とてもいい絵になる。

眼福。

つて、そんな場合じゃない。俺は何をしてるんだ。

と、うあえずこの子を起こして、俺が何故ここに居るのか聞かなければいけない。

そ、う、分かつてはいるんだが…………。

起こせられん。

とつあえず、まずは自分で何故こんな状況になつたか考えよ。

回想スタート。

いつも通り普通に投降した俺は、4時間目まではまじめに授業を受けたものの、給食を食べた後の5時間目・数学の聞いてもどうせ分からん教師の解釈を聞きながら、寝た。

回想終了。

とりあえず記憶に残る自分の行動はわかつたが、やつぱり聞かないと分からないな。

しかし……、やつぱり起こせられん。

仕方ないだろ？ 田の前でこんな可愛い子が寝てるんだぞ？

どうやつたつて罪悪感が出てくるだろ？

まあ、実際の所もう少しこのままでいたいというのが9割なんだが。  
それで、どうするかね……。

つて、俺さつさ「黒髪黒眼」つていってなかつたか？  
寝てるんだから、もうひと田の色は分からないはずなのに……。

## 序章（後書き）

誤字脱字、その他注意点・アドバイスなど、「意見よろしくお願いします。

## 第一章（前書き）

読んでください。ありがとうございます。

9 / 9 修正しました。

それから数分後。

「ふあ？ ん、あれ、起きたの？」

可愛い。

「はい。僕の名前は伊藤翔です。できたら、どんな状況なのか教えていただきたいのですが」「あつ、えつと、私はミーナ！ それから敬語はいいよ、堅苦しいの嫌いなのよね」

それから、ミーナは俺が何故ここに居るかを話してくれたのだが……、それは『森で倒れてたから町まで引っ張ってきた』という、至極簡単なものだった。

理解はできても納得はできないが、信じる。今、俺にはこの子しか知り合いが居ないからな。

何故そう断言できるのかと言つと、ミーナが寝ている時に外を窓から見てみたのだが、長期休暇に入るたびに旅行好きを飛び越えてマニアと化している両親＆姉に引っ張り回され、世界の国全部回つたんじや？ というくらいな俺が見ても、これは完全に見覚えがない場所だったから、多分異世界つてやつだと思つ。

ただ単に来てない国という可能性もあるものの、それにしたって授業中の教室でサボつて寝てたら外国、しかも森に置いてけぼりはおかしそう。

にしても、なんでこんなに落ち着いてられるのかね。昔から総勢

8人の大家族が持つてくる問題に何故か俺一人で対処して身についたスキルか？

「それで、なんでカケルはあんな森で寝てたの？ 見たとこ、冒険者って感じじゃなさそうだし」

冒険者？

「なんだ、その冒険者つて」

「え？ ……嘘、知らないの？ 辺境の村でも常識中の常識なのに」  
割とはつきり言つな、おい。

「冒険者ギルドつてのがあって、誰でもそこで登録すれば冒険者になれるのよ。冒険者は、冒険者ギルドで依頼を受けるの。薬草採取とか簡単なやつから、魔物討伐とか難しいのまであるわ。もちろん依頼には適した報酬があるから、冒険者は多いの。まあ、報酬が大きい分危険も多いけどね」

なるほど、なるほど。魔物討伐はとりあえずスルーしとく。

「その冒険者つて、資格とか必要なのか？」

「はあ？ さつき誰でもなれるって言つたばかりでしょ、ちゃんと聞いててよね」

カケル、バカ？ つていう田で見られる。ああ、すいませんね。

「でさ、その服はどこの国の服なの？」

「どの国つて、日本だけど。

「二ホン？ 何それ、聞いたことないわ」

あー、それなんだけどな。

それからかなりの時間を使って俺は異世界から来た事を伝えた。

「ふつん、そひ

信じたのか……？ それと、もうちょっと驚くべかと思つたんだ

が。

「そう？まあ、私、5歳より前の記憶ないし。概ね翔と同じなのよ。たまたま養子になつて助かったけど、お母さんとお父さんが居なければ路頭に迷つてたと思うわ」

あー、すまん、話したくなかったか？

「誰もそんなこと言つてないわ！ つたく、変な勘違いは止めてね

善処する。

「そうそう、カケルはこれからどうするのよ」

「とりあえず冒険者ギルドって所に言つてみようと思つんだが

「じゃあ、私が案内してあげるわ。どうせ道とか知らないんでしょ

？」

ああ、そうだな、そしそうと助かる。

「じゃあ、めざせ冒険者ギルド！ おー！」

ついで、そこまでやるほどではないんじや……。

## 第1章（後書き）

誤字脱字、その他注意点・アドバイスなど、「意見よろしくお願いします。

## 第2章（前書き）

読んでください。ありがとうございます。

9 / 9 修正しました。

## 第2章

「この大陸には3大国とよばれる国が存在している。

最大の領土を誇り、ドワーフ、エルフなど、主に人族以外の人気が集まっている『自然と動物』のナルニ公国。

全ての学院、研究院などが集まっている『知と権力』のガロサ王国。

そしてここ、冒険者ギルドの総本部を受け持ち、商人なども多い『力と名声』のユツイ連邦。

小さな村や町などは全てこの3大国の内どれかの領土であり、3大国に戦争などはなく、友好な関係である。…少なくとも、今のところは。

『自然と動物』とか言るのは、いわゆる一つ名だそうで。ナルニ公国は自然が多く、飛竜など動物が多いのでそうなったそうな。ちなみに、ガロサ王国は知識か権力があればなんとかなる、ユツイ連邦は力任せな人が多く、名声が全てを決めるかららしい。ユツイ連邦もある意味権力じゃないか?と思ったのは言わないでおいた。

まあ、これは全てミーナが冒険者ギルドに行く間話してくれた事だ。

「大体こんな感じね」  
「ふむ。それと、魔物は?」

「…本当に何も知らないわね」

仕方ないだる、じつに来てまだ半日もたつてないんだぞ。

ミーナによると。

魔物は3大国にとつて共通の敵であり。

ときどき村を襲うのでそのたびに押し返してゐるやつだ。

なるほど。やつぱり魔物は敵なのか。しかし、魔物には魔物なりの生活があると思うんだが……。

「……飛竜がいるって言つたでしょ？」

ああ、確かに言つてたな。

「ナルーには多いってだけで、少しだけならガロサヒコツイにいけるの。飛竜はね、とっても賢くて、人の言ひごとを理解するらしいわ。私、見つけたら速攻捕まえて育ててやるつと思つてるの」  
育ててやるつて……、おいおい。出来るわけがないだろ。

「飛竜を育てる人はいるわよ?

マジか……。

そういひしている内に田的の冒険者ギルドに着いた。

……何故だ、ものすごく視線を感じる。じついう物なのか？

「……冒険者登録お願いします」

『はい。そちらの方は?』

「登録するに決まってるぢやない!」

はあ！？

「おいおい、何してんだ？」

「何つて、私も登録するのよ。文句ある？そつだ、カケル、チーム組みましょ！」

はあ！？

「同じ反応なんてつまらないわね……」

「そういうことを言つた。俺も反省してるから……。

## 第2章（後書き）

誤字脱字、その他アドバイスなど、ご意見よろしくお願いします。

### 第3章（前書き）

更新遅くなつて申し訳ありません。  
これからは、もっと遅くなるかもしれません。テ스트が近いので…。

9 / 12 修正しました。

### 第3章

「ちょっと待て、チーム？ 組めるのか？」  
「言つてなかつた？ 組めるのよ」

つか、冒険者になるのか、お前が？

「何よ、悪い？」

「いや……戦えるのか？」

全くそつは見えないんだが。

「当たり前じゃない！ 強いんだから」

ならさつたとなつとけよ。それに何故俺とチームを……。  
「じゃあ登録しつくから。先に帰つてもいいわよ。大丈夫、私に任せなさい！」

すゞく不安になつたので一緒に行くことにした。

その後、ギルドの職員さんからいろいろ説明を受けたが、まあ知つた方がいいのはS,S,A,B,C,D,Eのランクがあり、まずはEからと言られた。まあ、他にも規則とか聞かされたんだが、そこは省略。暑苦しいおつさんの説明なんて、聞いてもいいもんじやないだろ？

兎にも角にも、『ギルドカードが明日完成しますので、依頼も明日からお願ひします』と言われ、とりあえずあの小屋に戻る事にした。

そういえば、さつきから気になつていたことがあつたな。  
「ミーナ、俺とお前が小屋を出た時から妙な視線を受けているのは

「何故だ？」

「あんたの服が変だからでしょ。私達の髪が黒なのもあるけど。あんた、もう少し周りを観察しなさいよね」

あー、そういうや金髪だの茶髪だのばかりで、黒髪は俺たち以外に居なかつたな。俺ももう少し周りの観察力や推理力とかいうのをつけた方がいいのかもしかん。どうやってつけるのかは別として。

「ん？ ちょっと待て、お前の髪は黒いだろ？」

「知らないわ、気付いたらこうだつたから生まれつきじゃない？」

「でさ」

「ん、なんだ？」

「カケルはなんで冒険者になるのよ。こっちの世界はあんたの世界より技術レベルは低いと思うし、発明家と研究者とかでもよかつたんじゃない？」

俺としてはお前が冒険者になる理由の方が気になるぞ。

「私が聞いてるの、答えなさい！」

うーむ。改めて聞かれると困るんだが。魔物を見てみたいとか、魔術はあるのかとか。まあ、一番の理由は生きていくためだな。帰る方法が分かつてない今は、とにかく仕事を見つけて金を稼がないと。異世界の知識を持つても俺は頭がいい方じゃないから、発明家や研究者は柄じゃない。考えるより即行動のタイプだ。一応は剣道とか柔道とともに親の趣味で無理やり習わされてたしな。

「ふーん」

興味なさそうだな…。聞いたのはそっちだぞ？

「それと、俺からも質問だ。『この世界はあんたの世界より技術レベルは低い』と言つたな？ 確かにその通りだが、何故それを知つてた？」

「え？ 私そんな事言つた？」

質問を質問で返すなと言いたいが、辛抱だ、俺。

「言つた。何故だ？」

「知らないわよ、そんなの」

そんなの言つた。俺が元の世界に戻れるかもしれないんだぞ？

「……なんですよ」

「俺の世界の情報は限りなく無に近い。ちょっとの手掛かりからでも帰る方法が見つかるかもしれないからだ」

後は、ミーナの存在になぜか違和感があるからだな。異世界の人間だからとも思つたが、ギルドの職員や冒険者を見てもそれは感じない。しかも、この違和感は危機を告げている感じじゃない。デジヤ・ビュのような……懐かしい感じだ。

「へえ～、あんたもそうだったんだ」

は？ ジゃあお前も？

「お前つていつのやめなさー… 私にはミーナつて名前があるんだから

「じゃあ、ミーナもあんたつていつのやめてくれないか」

「むう……わかったわよ

よし、交渉成立。

閑話休題。

「で、お……ミーナもなんか感じたのか？」  
「ええ、カケルの懐かしい感じじゃないけど  
じゃあなんだ。」

「……言つわけないでしょ、バー力！」

「おいおい…」

「ほり、さつさと帰るわよ！　いい、あんたには部屋を貸すけど、もしあたしの部屋に入ってきたら殺すから」

「物騒だな…」

「つるさい！　ほら、行くわよ！」

「ちょ、待てつて！」

### 第3章（後書き）

次回、ギルドで初めての依頼です。  
サブ…ヒーロー？ 登場です。

## 第4章（前書き）

最初に、登場する事になっていたサブヒーローが最後だけ登場となつたことをお詫びします。すみませんでした。

ほんの少し、残酷描写が入っています。

翌日、俺達は言われた通りギルドカードと依頼の為、ギルドに訪れた。

「そう。訪れた、の、だが。

「おーおい、お前みてーな坊主が冒険者なんか出来んのか？ ガキは家帰つて母親にでも泣きつことけ」

「ボスう、こいつらの讓ちゃんは可愛いですぜ？ よし坊主、有りつ丈の金とこ嬢ちゃん置いてけや」

……総勢5人のヤクザ（？）にギルド前で文字通りからまれていた。

いや、まさに王道的なチソピラだなあ、これぞ雑魚中の雑魚キャラだとか俺が思つてゐる。

「カケル……こいつら殺していいかしら

「いや、さすがにそりや駄目だろ」

殺人犯になつちまうからな。まあ、半身不隨ぐらいならいいが。「半身不隨つて……どうやつてその状態にするのよ。それに、半身不隨つて何気に酷いわね。せめて内臓破裂にしどきなさい」

ちょっと待て、内臓破裂も酷いぞ。下手したら死ぬんじやないか？ それに、元は言い出したのはそつちだろつ。

「むう…まあそつなんだけどさ、でヨ」

「おい、俺達を無視すんなよ！」

「なんだあ？ 逃げる相談でもしてやがんのか？」

「逃げられるとは思わない方がいいぜ？」

「俺達やBランクチームの『ゼウス』だからな？ 甘く見るなよ

「 「 「 「 わうだ、そうだー！」

何たる連携プレー。拍手を送りたい。

「バカ言つてる場合ぢゃないでしうが！」

つかそろそろウザくなつてきたから黙らせていいか？

「するならわざとしなさこよー。つたく」

了解。

俺は瞬時に雑魚共の背後に回ると、常人には見えない速度で首筋に手刀を叩きこんだ。

……何か異様に行動早くないか？ 異世界だからって事にしどう。

「へえ、けつこいつ行動早いぢゃない。褒めてやつてもいいわよ？」

「はいはい。……見えたのか、今のが。まあいいが、

「ミーナ、わづきこいつが言つてた『ゼウス』って……」

「神話上の神様でしょ？」

やつぱりそうだよな。異世界のくせに、何でこんな所は同じなんだか。にしても、こいつらが神ねえ。似合わないな。

「似合わないどこの話ぢゃないわ、神に対する無礼よ、無礼」  
言われてみればその通りだな。ん？ 神様信じてるのか？

「別に。ただ、誰でもこいつらに自分の名前を使われたくないでしょ」

これまたその通りで。ああ、わざとギルドカード貰いに行くぞ。

「ええ、早く行きましょ。全く、無駄に時間を使っちゃつたわ

それは俺も否定できん。肯定してもいい。

「あの極悪非道と言われるBチーム『ゼウス』をあつとこつ間に……！」

「あの一人は神様、いや、勇者か……？」

一部始終を見ていた町民にとんでもない方向で勘違いをされるいふ事を、この時の俺は気付いていなかつた。

「ミーナ、良い依頼あつたか？」

予定通りギルドカードを受け取つた俺達は、良い依頼（主に金銭面的な意味で）がないか探していたのだが。

「だめね、討伐依頼はどれもDランクからだわ」

だよな、Eランクなんて「掃除の手伝い」「引っ越しの荷造り」

「店の荷物運び」とか、町の雑用しかないと。

個人的に冒険者が雑用つて言つのは何か納得いかないんだが。

「ん、これならまだマシかしら」

「何だ？」

「薬草採取よ」

「おお、雑用よりはましかもな。期間と場所は？」

「期間は3日以内、場所は町の外の魔物も出ない、平和な山よ」

「山？」

「そう。町から片道30分で着く距離よ。この辺りじやこの山しか生えてないのよね」

「ふむふむ、なるほどなるほど。何の薬草だ？」

「ハリヘネ草を20本、多く持つてきたらギルドで買取もしてゐるみたい」

よし、それにじょい。

「じゃあ、早く……忘れてた」

「ん?」

「武器よ、武器。買つておかないとだめじゃない」

「武器、ねえ。必要か?」

「当たり前でしょ」

「そうかい。じゃあ、買いに行きますかね。

「そうね。カケル、何買つのよ」

「あー、そうだな。ふむ……剣にしよう。

「そう。私の武器は家にあるから、一回帰るわよ

了解。……でも俺、金無いからな?

「大丈夫よ、私が買うから」

「おお、何から何までありがとな、ミーナ。

「……勘違いしないでよ、偶々お金が余つて使い道がなかつただけで、別に貯めてたへそくり出したとか、大体の武器屋を予め回つてたとか、そんなことはないんだから!」

そこまで取り繕つと逆に怪しげってこと分かつてないだろ。……。

「ここのよ

「へえ……」

「武器屋なんか初めて来た。いや、日本だつたら戦争もないし当たり前なんだが。

「おう、こりつしゃい! お密さん、欲しいのは……」

「ん? 言葉が止まつた? つて……」

「……タクヤ？」

武器屋のカウンターに茫然と立っていたのは

「……カケルが何故ここにいる……？」

幼稚園から高校までずっと同じクラスといつ腐れ縁、

『高野

拓也』だった。

## 第4章（後書き）

今回は最後のみの登場でしたが、次は必ず登場しますので「安心ください。

：初めての依頼だったのに、依頼の件も全く出て来ませんでしたね

：。

重ね重ねお詫びいたします。

## 第5章（前書き）

勢いで連続投稿いたしました。

遅くなりましたが、お気に入り登録ありがとうございます！  
初投稿となるこの作品ですが、これからも応援よろしくお願ひします。

## 第5章

「……本当にカケルか？ 偽物じゃねーだろ？」「……ああ。そっちこそ……ドッペルゲンガーだつたとかいう間抜けなオチじやないだろ？」「な

「本当に、本物だな？」

「くどいや。というか、何でお前がここに……ぐほおつ！？」

「カケルウウウウウう！」

ええい、暑苦しい！ ウザい！ 抱きついてくるなー セツセツ離れるおおつ！

数分後。

「すまん……、取り乱した」

全く……変わってねーな、お前は。せつせつ、抱きついてくるの禁止な。

「だ、だがカケル！ 抱き合ひつていう事は親密な関係を表すために必要なスキンシップでは……!?」

誤解を招くような事を言つた、氣色悪い。

「つれねえなあ、冗談だぞ」

お前のは[冗談に思えねえんだよ]……。

「……カケル、誰こいつ

悪い、無視してたな。

「あーすまんミーナ、こいつは  
「なつ！？ 僕という者を差し置いて、美少女に手を出すだとツー。  
？」

「ぶつ殺すぞテメエ」

「ハイ、スミマセンデシタ」

わかれればいい。

「……まあいいわ、で誰よ」

「あー、高野拓也、俺の腐れ縁で現クラスメイト。  
で、親密な関係なのね」

違つ、間違いなく違うぞ！ ミーナ、勘違いするな！

「おお、よく分かってるじゃないの、ミーナちゃん。同士だな」  
「お前も肯定するな！ それに何だ同士つて…」

聞き逃せなさすぎる…

「え？ 高校版カケルファンクラブの事じゃ？」

「聞いたこともないぞそんな物！ 頼むから嘘と云つてくれ

高校版と言うところにも激しくツッコみたい。

「知らなかつたのか？ さすが先輩……」

「ちよつと待て、先輩つて誰だ」

「教えることはできん。最低限の守秘義務だ

「吐け」の野郎

「落ち着きなさいよ、カケル。で、コーノだつけ？ 私も入つてい  
い？」

「ミーナ、冗談だよな？ そうだと黙つてくれ」  
本当だつたら激しく恥ずかしい。悶え死ぬ事、間違いなしだ。  
「おお、いいぞ。最後のナンバーは……確か649だつたか」  
「おおーい、ちょっと待てー？ 僕の高校は537人在籍だつたよ  
なー？」

何その半端ない人数。つーかあり得ないぞ。

「もし、百歩、いや一万歩譲つたとして、俺にファンクラブなる物  
があつたとして、650人近くも入る人がいる訳ないだろう」  
「これだから鈍感は……。いや、フラクラか？」  
「どっちでも同じようなもんじやない」  
何故だ、とても不名誉な事を言われている気がする。  
「あ、ちなみに200人弱は男だからな？」  
ちょっと待てえええええ！

いや、これ全部「冗談だよな？ 俺にファンクラブなんかないよな？」  
「いい加減認めろよ、カケル」  
「カケルのせいで疲れたわ……」  
「俺か。俺のせいなのか……？」

「そういうえば、武器どうするのよ……」  
「おお、全く忘れていたな。」

「もう、依頼は明日にして武器買つたら帰りましゅう」  
「ん？ 何買うんだ、俺店員だから言ってくれ」

「そうだな、とりあえず剣を買いたい。」

「ああ、お前、剣道参段だもんな」

「覚えてたのかよ……。」

「剣が集められてるコーナーだ、ちなみにここにあるので全部だ、予備とかはないぞ」

「ほう。じゃあ、一通り見てみますかね。」

「出来れば刀のような物があるといいが、そりつまくさいかないよなあ……。」

「これは細い、あれは短い、それは軽い……。いいのが見つからんな。」

「そういえば、一つとつておきがあるぞ」

「どんなやつだ？」

「とにかく重い。それ故に長く、また適度に太い代物だ」「なんだその説明は…… とりあえず見せてくれ。」

「ああ」

「これはまた……」

「……でかいわね」

「そうだろう、この店で確實に一番でかい剣だ」「行動が制限されそうだな……、兎に角持つてみるか。」

「おい、それは試した全ての客が持てなかつた」

「おお、結構軽い。」

「 箕なんだがな」

「 ちょっと、あたしにも持たせなさい」「だから、カケルはともかく女の子が持てる物じゃ

」

「 ..... ちょっと重いわね、これで戦闘はきついわ

「 嘘だろ?..」

「 なんで持てるんだよ、お前ら.....」

いや、俺に聞かれても。つか、これならお前も持てただろう。

「 それとこれとは別だ」

持てたんじゃねーか。

「 ハー、カケルはチートよチート、気にしない方がいいわ  
俺がチートならお前もチートだろ?。

「 む、失礼ね」

だつて絶対間違つてないしな。

「 そうだ、タクヤこれ買うぞ。ミーナ、金

「 ちょっとは遠慮とかしなむよね.....」

「 ああうん、もういい、なんかどうでもよくなってきました.....」

大丈夫か?

「 その原因のカケルに言われたくなえー」

「まごどあり、つと。やつこえば、ビリの宿に泊つてゐんだ?」

ミーナの家だが。

「は?」

だから、ミーナの家だつて。

「……お前ら、知り合つてからどのくらいだ?」

「今日で2日目になるけど、それが?」

「何……!? 2日目で親公認の一つ屋根の下だとつ……いつたいど

こまで……! ?

「「変な勘違いすんなああーーー.」」

今日は依頼に行くはずだったのに、何でこんなことになつてゐるんだ?  
だ……?

## 第5章（後書き）

遠慮なく、誤字脱字、その他アドバイスなど、ご報告ください。

## 第6章（前書き）

せひこれもした...。

## 第6章

武器屋に行きタクヤと再会した翌日、朝。タクヤのとんでもない間違いを直すのに、1時間はかかったと言つておこひ。

その後、料理屋で名前は解るがどんなものか全く分からない「パゲジエファ」というパスタっぽいものを食べ、家に帰つて寝た。もちろん部屋は別だ。

で、その翌日、俺達は町から離れた草原に居た。此処に居るのも、昨日のタクヤの発言が原因だ。

そう、タクヤは、

「依頼つて今日受けたんだよな？ つて事は期限は明後日になる。どうせ薬草採取なんか一日もあれば終わるだろ？ 俺も手伝うから、明日は訓練しようぜ！ あ、カケルは買った剣だろ？ 俺も自分用の剣持つてるから覚悟しとけよ？」

なんて事を言い出したのである。

「つたく……俺はさつさと山に行つて薬草を集めたいんだけどな主に金のために。」

「そんなこと言つても來てるんだから、お人好しけりむせ。」

「あ、照れてる？ 実を言つと、私も移動したいんだけどね 移動？ 依頼じゃなく？」

「あー、えっと、うん、まあいいじゃない」

……今まで気にならない人はいないと思つた。ミーナ、いつたい

「おお、来たかカケル！ 信じていたぞ、心の友よ。」  
走ってきた勢いのまま抱きつくな、ウザい、暑苦しい！

「抱きつくな禁止って言つたはずだろー？」

「了承した覚えは一度としてない」

今しき、すぐしろ。

「……やつぱり親密な関く」

「ミーナ、絶対違うから！」

「おお照れてるのか？」

何故だ、同じ意味なのにミーナにあつた可愛らしさがかけらも感じられない。

「いやあ、そんなに褒められても、何も出ないぞ？」

断じて褒めてない！

「やっぱり親密なく」

もつやめましょ／＼おー／＼ミーナさん！？ ていうか、分かっててやつ

てるよな？

「さて、どうかしら？」

なんだその笑顔ちよつタクヤ抱きつくなうわあああああ……。

「ミーナ」

「何？」

「絶対に楽しんでるだろ、やめてくれ」

「嫌よ」

「何故だ、何故……！」

「それと、さつきの事だが」

「さて、始めるか、カケル」

「おい、言わせろよ、タクヤ

「何がだ？ ほら、行くぞ」

「引っ張るな、服が破ける！」

「ミーナ、さつきの何なんだよ！」

「カケル、せいぜい頑張りなさい

「スルー！？」質問に答えるツ！

「嫌。じゃあね、薬草集めてるから

おいつ。俺の話を聞け！」

何故だ、まだ運動していないのに疲れている気がする……。

「さあ、行くぞカケル」

「ああ

「じゃあ、スタート！ 頑張りなさいよ

つて、ミーナ、何時戻ってきた！？

「よそ見してる場合か！」

切りかかってくる剣を受け止める。力を込めて押し返せ……ない？

「普通の重さじゃねーな、この剣……」

「俺の剣を受け止めて耐えるなんて初めてだな、燃えるぜ」

「くそ、タクヤの体重＆剣の重さが、比率は8対2だな、デブだし」

一回距離をとり、走り出す。

「俺は『ブジヤネえ、お前』じゃ細すぎんだよー。」

最高の速度で背後から襲いかかるが、受け止められる。

「細くねえ、俺ぐらいがちょいどいいんだよー。」

足払いを飛んでかわし、お返しに腹に一撃を叩きこむ。

「それにお前はけつこうつ食べるくせに太らないとは何事だッ！ 太れ、太れ！」

タクヤのダメージが少ない事を悟る。と、蹴りを繰り出してきた。

「俺より食べる奴が何言つてやがるッ！ 俺は太らない体質なんだよッ！」

バク転でかわし、フェイントを織り交ぜながら攻撃。

「太らない体質……!? 女の敵、女の敵がここに居るぞ、ミーナちゃん！」

隙を見て蹴りを出すが、よろけたものの転ばせる事までは出来なかつた。

「あーはーはー、そうね」

「投げやりすぎる、此処は怒るとこだらつー。」

「ミーナもお前がバカすぎるから呆れたんだよー。」

「何い！？」

「呆れてるのはカケルにもなんだけど……。よく喋りながらそこまで戦えるわね」

そのミーナの弦きが俺達の耳に届く事はなかった。

## 第6章（後書き）

依頼と鍛錬が混ざった形になつております。  
極神さんのアドバイス通り、とりあえず、鍛錬をさせてみよつと思つたんです。

ミーナは魔術師なので、相手はタクヤにしようと思つたんですよ。  
ですが、書いてみたら何故かギャグになつていいような……！  
違う物を想像してた方は申し訳ありません。私の力ではこれが限界  
です。

後、 極神さんへの返信に書き忘れていたのですが、ハーレムだか  
らといつて、  
女性だけとは限つませんのであしからず。

誤字脱字ありましたら報告お願いいたします。

## 第7章（前書き）

PV・ユニーク数がすごい事に……！  
感謝感激です。

数十分後。

「はー、はー」

疲れた……。うわつ、あぐびで涙出てみた、眠い……。

「ぜえ、ぜえ」…

タクヤ……、蹴りはないだらう。剣だけかと思つてたからパンツだったぞ。

「慌てずバク転でかわして反撃してきたくせに何言つてやがる……」

「いや、じゃあ反撃しないで何をしろと言つんだ……」

「もう、話してたらもう体力無くなるわよ、ほら、薬草取つてきたからギルドに戻るわよ、立ちなさい」

早、何時の間に……。つかちょっと待つてくれ、動けねえ。それに眠い。

「右に同じく。今は無理だ」

「何言つてんのよ、ギルドでまた依頼を受けられるのよ？ 良い依頼が取られたらどうするの」

いや、それはそうだが……。頼む、もう少し休ませてくれ。

「……し、仕方ないわね。少しだけなんだから、たまたま食料が残つてた事に感謝しなさい！」

ああ、するよ、ミーナすまないな。

「うつ、も、もういいわよつ、さつきと休んでなさい」

食事が出来るまで眠らせてもらつがいいか？

「だから早く寝なさいよッ！」

じゃあ、お言葉に甘えて。

「はうう……」

「上田づかい×涙目×情けない声の3連コンボか、さすがカケルだ、うん。ファンクラブ造ってるだけある」

一眠りして料理が出来たと、タクヤに呑き起された。

……起きられるのはミーナが良かつた。

「何でだ!? お前まさかミーナちゃんの事をツ!/?」

「違うわ! 大体、会って3回……? そんなような……違つうな……。」

「ん? 昨日会つて2回つて言つてたんだから、今日で3回だ」確かにそうなんだが……間違つている気がするんだよな……。

「まあまあ。俺も初めて会つた気がしなかつたし」

お前もか? ミーナも同じことを言つていたような……。

「それはともかく、さつきのはどういふ意味だ」

「ん? 男ならむずかしくて男より、可憐な美少女の方が良いに決まつてるだろう。」

「……れ、例外と言う物がある」

「ならそいつはゲイだな、間違いない。」

「お、男の方が安心するとか……」

「その時点でゲイじゃないか……?」

「女性恐怖症とか……」

「だからゲイだって。」

「ぐうう」

タクヤ、撃沈。

「何やつてんのよ……。ほり、けんちん汁。食べなさい」  
おお、懐かしき母の味。……いや、母さん死んだわけでもないのに何言つてんだ、俺。

それにしてもうまい。今日食べたのは聞いた事も無い異世界料理だったし。やっぱり慣れてる料理の方が良いな。

「そうだな、分かるぞその気持ち。師匠には悪いが材料から何から違う料理ばかりだったからなあ」

「ありがと。これは昔から得意で、母様にもよく褒められたのよ」  
へえ。……んん？

なんだ、何か違和感があるよつな……。そつだ。

「ミーナ、何故この料理を知つている？」

「何言つてんのよ、そんなの……え？」

「……確かに俺達の世界の日本料理なんて、知つてゐるはずないな」

「あれ、何で？」

本来ならこの世界の住民であるはずのミーナが俺達の世界の、しかも日本料理なんて知つてているわけがないのに、ミーナは知つていた。

どうこいつことだ……？

「おかしいな、どう考えても」

「ああ。だが、答えが出ない分には仕方がないだろう。

「じゃあ、この件は保留ね」

「仕方ないな。

俺、何か分かつたら報告するから。2人もよろしく。

「「当然」」

小さい事なのかもしない。

だけど、気になる。気になってしまつ。  
まるで喉の奥に何かがつまつたような、分かぬよつて分からない、  
もどかしい感じ。

結果はつまらない事かも知れないが、調べてみる価値はある。

そういうば。

俺はミーナに初めて会つた気がしない。  
タクヤも同じ事を言つていた。  
ミーナも、俺に会つた事がある気がすると、この前言つていた。

この2つは何か関係があるのか……？

## 第7章（後書き）

毎回短くてすみません。

最後、雰囲気がミステリーっぽくなっているのは、JR承ください。  
別にそんな謎でもないので。

次回から予約掲載になります。

誤字脱字ありましたら、報告ください。

## 第8章（前書き）

予約投稿失敗しました。  
すみませんでした。

## 第8章

「で、けんちん汁の事はともかく」

「ん？ なんだ、ミーナちゃん」

「どうかしたのか？」

「単純に疑問なんだけど……、コーコーはどうしてこの世界にいるの？」

？ 「一ノも、カケルが何でこの世界に居るか知ってる？」

「「あ……」」

「そうか、あまりに単純すぎて忘れていたな。

「「なんでお前はこの世界にいるんだ？」」

「被つた？」 じゃあ、

「「お前から話せ」」

……いやいや、何で俺から話さなきやならないんだよ。

「それはこっちの台詞だ、カケルから話してくれ」

「タクヤが先だろ」

「いや、カケルが……」

「タクヤが……」

「もう、面倒臭いわねー。カケルから話したらいいじゃない、何を  
言い合ってるのよ」

まあ、それでいいか。

「高校の授業サボつて昼寝したら、ミーナに助けられてた  
「高校サボつて家で昼寝したら、師匠が目の前に居た」

……。

「違ひは授業か高校かで、つまりどちらもサボつたってことね。五

十歩西歩つて言葉が此処までペラタコくるなんて、始めてよ

反論できと……！」

「アハいえばタクヤ、師匠つて誰だ？」

「武器屋の師匠」

師匠？

「マーノが店番した所？」

「ああそうだ。とつあえず、まともな職が見つかるまでは、出世払いで置かせてもらつてる」

ギルドで冒険者になればいいんじゃないのか？

「元手がいるだろ。冒険者＆ギルドカードの金、使つ武器の金、その他ものもね」

ああ、なるほど。

「武器持つてたじやない。それに、置いてもいつなりお金貸しても  
りえばよかつたんじやないの？」

「金を貸してもいつ代わりに、住み込みで働いてるんだよ。武器は  
金ためて、やつと買った。俺も冒険者になるつもりだからな。で、  
その金を今は貯めているんだ」

「じゃあ私がなんとかするわよ」

……何とかつてどうするんだ？

「わからん冒険者登録をさせるに決まつてるじやない」

「ミーナちゃん、そんなお世話になるわけにはいかない。金だつて  
貯めている」

「そのまま貯めときなさい。お金は有るに超した事はないわよ？」

「やまあ、それは全く持つてその通りなんだが……。」

「でも、ミーナちゃんのお金が……」

「そうだ、ミーナ。お前の金を使う必要はないぞ？」

「何時私が、自分の金を使つて言つたのよ」

「「はあ？」」

いや、だつて、タクヤの冒険者登録に掛かる金をお前は払つてしまつてゐるんだな？

「違つわよ。わざと言つたじゃない、冒険者登録を『やせる』って

「……おこねい、そりゃどうこつ意味だ、ミーナちゃんさん

「口ネを使つてよ」

……満面の笑顔で言われても。

「うんうん、口ネつていいわねえ」

ここはギルド前。薬草採取の依頼を達成し、タクヤの冒険者登録も済ませ、新たな薬草採取の依頼を受けて、出てきたのだ。薬草採取の依頼が多いと思わないでもない。

そして、今現在タクヤは頃垂れでいる。やはり、自分の力で登録したかったのだろう。もう遅いが。

「俺が……、俺の苦労はどじに……」

……「愁傷様。でも、金は無くならなかつたし、結果オーライだるべ。

「わうじやない、じつこのは気持ち的な問題で……」

それだと俺はどつする事も出来ん、すまん。

「うわっ……。お前等かよ」

「誰だこの男。ミーナ、知り合いか？」

「！」の前絡んできたチンピラ共のリーダーじゃないの……。何で忘れてるのよ

すまん。全く興味がない。

「俺に興味がないだとおーー？」

「ああ。そうだが？」

「お前は上位チームのリーダーに敬意を払おうとは思わねーのか！」

思わん。尊敬とかは認めた相手にしか俺はしない。何であつさり負けた奴に敬意を払おうという思考になれるんだ？

「それだ！ 俺達がやられるなんて事はあり得ないんだよー。ビデウせお前、何かイカサマしたんだろ？」

だから。何でお前！」ときにはイカサマをする必要があるんだ？ 必要ねーだろ。

「そんなわけが

「ええい、煩い奴だな。眠つてろ。

「ごふつ

蹴りを脛に入れておく。これで煩くないだろう。

「カケル、いつまでそんな奴に手間取つてるのよ、早く行くわよ」  
了解。

さて、そろそろ街門だな。

「セキユリティ甘いよなあ、普通見ただけで通さないだろ」  
同感だ、危機感つてものがないのかね。

「油断してるんでしょ、ここ何百年か戦争なかつたらしいし

なるほど。

街門にたどりつくと、街門警備をやつてるらしい騎士2人と、その2人に涙目で頭を下げる16くらいの女人の人気がいた。

「お願いします、妹と弟を探してください！」

「しかし、我々はここを離れるわけには……」

……悪い予感が……。

## 第8章（後書き）

誤字脱字、その他アドバイスなど、お待ちしております。

## 第9章（前書き）

作者の名前変更しました。  
「ぼてと 桃野アリス」です。  
それにも、学校つて嫌ですね……。

「お願ひします、妹と弟を探してください……。」  
「しかし、我々はここを離れるわけには……。」

何か事件っぽいな、おい。

「そうね、行ってみるわ。……どうしたんですか？」 何か事件でも

？

お、ミーナが敬語を使っている。

「……殺すわよ？」

すみませんでした。

「そ、それが、タクヤさん？」

知り合いか、タクヤ。

「誰かと思えばルティさんか。カケル、町で一番の宿屋『恵章亭』の娘さんのルティさんだ。何でこんなところに」

「初めてまして。それが、朝、妹と弟が遊びに行つたきり、帰つてこなくて……」

何？

「初めてまして、カケルです。遊びに行つたといつのは何時頃ですか

？

「えつと……午前8時頃だと思います」

5時か……。今が1時、もう6時間は経つてるな。

「初めは誰かの家に遊びに行つているものだと思っていたんですけど、何時もなら帰つて来る11時くらいからおかしいと思って、騎

士団に捜索をお願いしたんですね

ふむ。

「けど、見つからなくて……つこせつか、町の外に2人が出ていつたと聞いて……」「なるほど……。

「我々としても捜索したいのは山々なのですが、ijiを離れる事は出来ないのです……」

「この騎士さん、嘘言つてないな。ものすじに悲しそうな顔してるし。

……というか、もう一人の騎士さんが羽交い絞めにしてるし。

「わかりました、私達は依頼で薬草を取りに行くのですが、探してみましょ?」

ミーナに賛成。

「つーか、ここで反対したらただの鬼畜だろ……」「

『もつとも。

「ありがとうござります、あ、妹はグレー・テルで、弟はヘンゼルと言います」

……まんま「ヘンゼルとグレー・テル」だな。いや、こんな事考えてる場合じゃないんだが。

「グレーテルさんとヘンゼル君ですね。出来る限り探してみます」「よろしくお願いします……」

「薬草は見つけたら採取、子供たちを優先、わかつたわね?」「もちろんだ。

「むしろ薬草なんか無視しちゃつてもいいわ、2人を見付け

るの」

「「了解」」

数十分後、かなり探したが、まだヘンゼルとグレー・テルは見つかっていなかつた。

「見つからなーいな……。遊びついで、どこまで行つたのかね、2人は遅い……、拓也の奴、いつ戻つてくるんだ

ん？ なんだ、今のは？  
気のせい？ 幻聴つて本当にあるんだな。

「うえつ、返してよ……ヘンゼルのだもん……」

ちょっと、やめなさい！ お兄ちゃんのなんだから

「ヘンゼル？ グレー・テルか」

また幻聴が聞こえた気がしたが、無視だ、無視。

兎に角行つてみるか。何故かはわからないが、泣いている気がするし。

辿り着いた花畠に居たのは、座り込んだグレー・テルと、少し離れたところでフラフラしている不審者だった。

「うえ、ひっく……帽子、返してよお…」

わざわざかいつてるでしょ、わざわざ返しなさい

「僕と一緒に来てくれれば、返してあげるよお」

ふん、誰が返すか。俺が使ってやる

何だ？

このやつさから頭の中で鳴り響くこの声は、何なんだ？最初は幻聴かと思っていたが、此処まで鮮明に何度も聞こえてくると、それでは説明できない。

瞬間、思い出したのは夕暮れ時、小学校の帰り道での一つの情景だった。

そう。入り組んでいて誰も好き好んで入るつと思わないような裏道の先では、大柄な男に抵抗する女の子の姿があつたんだ。

## 第9章（後書き）

最近スランプ気味です。

暇つぶしに書いている小説のほうが書きやすくなってしまったんですね……。

不甲斐無い作者ですみません。

投稿が遅れる事は無いので、優しい方は「安心?」下さい。

## 第10章（前書き）

更新遅れました。

私に予約投稿は向いてないんでしょうか……。

今回は異世界ではなく前の世界での話になります。

その日、まだ小学6年生の俺は本来の通学路では無い裏道で、忘れ物をした拓也が戻つてくるのを待っていた。

「遅い……、拓也の奴、いつ戻つてくるんだ」

ここから小学校まで往復約10分だが、もう15分は経っているな。

忘れ物は俺が貸した本で、元々は姉に借りた物で、今日必ず返さなきゃいけない。

家に入った瞬間、姉に挨拶もなしに催促されるのは必須。なのに拓也が忘れたから、此処で待っている。

さつさと帰つて返さないと、しづれを切らして迎えに来るかもな。

全く興味ない本なのに、何でそこまできつちりしてんのかね。ちなみに何故正規の道ではないかと言つと、そういう道には決まつて大人が居るからだ。

ずっと壇に寄り掛かっている小学生 ランドセル付き を教員が見逃す派がないからな。悪い事ではないんだが。

其の仮ボーツといふと、誰かの声が聞こえてきた。

「ちょっと、やめなさいー。お兄ちゃんのなんだから誰か知らんが、することもないし、行つてみるか。

「さつきから言つてるでしょ、さつさと返しなさい」

そこに居たのは、気の強そうな美少女に、如何にも柄の悪そうな

大男。

「あの子は……叶井美衣奈か。もう1人は誰だ？」

叶井美衣奈。

俺が通っている董小学校のアイドル。

容姿端麗、文武両道、博学多才、全知全能の完璧超人。

しかし、その性格は元氣溌剌、天真爛漫、威風堂々、獅子奮迅、活潑溌地、大胆不敵、天空海闊、自由闊達、意志堅固などの四字熟語がぴったり当てはまる。

まあ、何を言いたいかと言つと、とんでもなく元氣で、とんでもなく気が強く、とんでもなく意志が強いつて事だ。もちろん悪い子ではない。

野郎共が2000人ほど告白して、その全てが玉碎したといつ。兎に角、学校内所か、市内にも知らない人がいないんじゃないかというくらいの有名人。

そんなアイドルが、こんな裏道で何をやつてるんだ？

「ふん、誰が返すか。俺が使つてやる」

「はあ？ 女物のブローチよ、あんたなんかに似合つ訳ないじゃない」

あー、ブローチ取られたのか。なるほど。

「俺の妹にやるんだよ」

「あなたの妹？ 似合わないわね、間違いないわ」「何でだよ」

「あなたの妹だからよ」

うわあ。兄が悪いからって、妹まで悪いとは限らんだろう。ブローチを取られている身としては、気持ちが解らんでもないが。

「なんだと？　あいつを悪く言ひのは許さねえぞ！」

「きやつ」

「おいおい。……口リコソんだな、間違いない。

「止める。突き飛ばすのはやり過ぎだ」

「誰だ、お前」

「人の名前を聞く時は自分からって習わなかつたのか？　一般常識だろう」

「はつ。俺は鬼島だぞ？」

「だからどうした。つーか聞いた事ねえ」

「何だと！　この鬼島の事を知らないのか！？」

「知らん」

「お前……ブツ殺す！」

「軽々しく殺すとか言ひなよ、つたぐ……」

その20秒後、俺が勝つた。

といつても、足払いをして転ばさせただけで、喧嘩とも言えないような物だったが。

「ちよつと……」

あー、えっと、叶井さん。ブローチ取り返したぞ。

「あ、ありがと」  
「どうござました」

「私の事知つてゐるみたいだけど、もう一回血口紹介するわね。私は

叶井美衣奈。あなたは？」

「俺は伊藤翔、初めまして」

「おお、翔、此処に居たのか！　って、叶井さん？」  
やつと来たか。

「叶井さん、俺の親友の高野拓也」

「親友と言つてくれるか！　心の友よ！」

「ええい、抱きつくな、うつとおしい！」

「ふふ、仲が良いのね」

何処が！

「分かつてくれるか！？」

「ええ」

認めないでくれ、叶井さん！

「何で？　何処から見ても仲が良いわよ。それから、私の事は美衣奈で良いわ」

「どうか？　じゃあ、美衣奈。

「美衣奈ちゃん」

何故ちゃん付け？

「なんとなく？」

「なんじやそりや。

「いいわよ、私はそれで」

「どうか？　ならいいが。それから、俺の事も翔で良いぞ。

「じゃあ、翔」

「ああ、それでいい。」

「そろそろ、今度の日曜日、暇？」

俺は大丈夫だが。

「俺も」

「じゃあ、こんど北南公園に来てくれない？　今日のお礼もしたいし、会わせたい子たちもいるの」

いいぞ。

「おお」

「絶対よ、約束だから」

分かつてゐるつて。

そうして、俺達は後日美衣奈に紹介された3人も含めて、6人でいつも一緒に居た。

そう　　美衣奈が消えた、あの日までは。  
?

## 第10章（後書き）

ちなみに、これ以上前の世界での話は続きません。

もう少し後で、何話かまとめて「小学生編」で投稿します。  
なので、この後はまた異世界の話になります。

閲覧ありがとうございます。

まだまだ未熟ですが、これからも応援してくださると嬉しいです。

誤字脱字、その他アドバイスなどご報告お願いします。

## 第1-1章（前書き）

すみません、遅くなりました。  
難産です。また、少々残酷な表現があるかもしだれません。  
それほどでもないと思うのですが……。

そうか　思い出した。

だが、かなり昔のことであつても、幼稚園ならともかく小学6年生、12歳だ。ミーナ達の事を覚えていないわけがない。

何故だ、何で俺はミーナ達の事を忘れた？

いや、俺だけじゃない。タクヤやミーナが覚えていたのなら、顔は覚えていなくとも、名前を聞いてすぐに気付くはずだ。  
という事は、少なくとも俺達3人分の記憶があの頃の時だけ抜けているという事になる。

ミーナが消えたあの日に、偶然俺達3人の記憶が同時に消えたなんてある訳がない。

一体、これは誰の策略だ？

分からぬ　推理するにはピースが少なすぎる。  
だが、これだけは分かる。

俺達3人の記憶が消えたのは決して偶然ではなく、またこの世界に渝つて現れたのもたまたまではないかも知れない。  
まさか、この時に俺が記憶を取り戻すのも誰かの予想範囲内か？

まだ、俺には何も分からない。

けれど、こんな馬鹿な計画を立てた野郎は必ず一発殴つてやる。

「やめる、グレー・テルに近づくなッ！　その帽子も返せッ！」

つと、回想してる場合じやなかつたな。しかし、あの子はヘンゼルか？　おお、ラツキー。探す手間が省けた。

「男の子かあ。僕は女の子にしか興味ないんだよねえ。早く何処か行つてくれるかなあ？」

「こいつ、正真正銘の変態だな。

「そこで止まれ、動くな変態」

「ふえ……？」

「兄ちゃん、誰だ？」

「そんな事行つてる場合か、グレー・テルを連れて早く逃げ  
やばい、気が付かなかつた。30人ほどに囲まれてやがる。

「お前達、何者だ？」

「盗賊だ」

自分でそれを言つかよ、くそつ。

さすがに、この人数相手じや2人を守りながらじや厳しい物があるな……！

そう思つた瞬間、茂みから誰かが飛び出してきた。

「カケル！ 僕が2人を守る、田を隠して見せないようにもする。  
だから、思いつきりやつちまえ！」

誰かと思つたらタクヤかよ、ビックリさせんな。だが、  
「わかった」

その提案には賛成だ。

「カケル、私がサポートをするわ」  
了解。

「はつ、この人数相手に勝てるとしても  
近寄つて来た盗賊共を、剣を回転しながら振るう事で追い払う。

「この野郎！」

切りかかつて来た盗賊の剣を受け止め、力任せに押し返す。

「彼の者を焼き焦がせ

ファイアーボール！」

「ぐああつ！」

背後からミーナの呪文と悲鳴が聞こえた。ミーナの魔法で焼かれ  
たらしい。

「ぐおおつ」

盗賊の肩を切る。これでもう腕は使えない。一安心だ。

「カケル、左！」

おつと。振り向きざまに剣で盗賊の腹を切る。

「2人に近づくんじゃねえつ！」

「くそつ」

「タクヤ、大丈夫か！？」

「心配すんな、そっちを早く終わらせてくれ！」

「了解！」

「終わったか？」

「ああ、怪我していないか？」

それが問題だ。

「おお、俺の事を心配してくれるのか！？」

アホ、2人だよ。

「なんだ、大丈夫に決まってるだろ、俺が守ったんだから」「  
まあそなうなんだが、一応確認だ。

「なあ、もういいのか？」

ん？ つて、お前タオルで目隠しさせてたのかよ。

「それが一番確実だろ？ ついでに手で耳も塞がせたぞ」

耳を塞がせたのはいいな。音も聞いてたら気持ち悪かっただろう  
し。

「やうだらう、やうだらう

「あのねえ、田隠しを取つてあげなさいよ。何でほつとこてるのよすまん。でも、この光景を見せるのは聊か酷な物がないか？  
確かに、其処ら中に血が飛び散つたりしてるし」「じゃあ移動させればいいでしょ。どうせ匂いは伝わってるでしょうけど。ほら、さつさと行くわよ」

盗賊共はどうするんだ。

「そんなの、騎士に連絡して運んでもらうに決まつてるじゃない。  
こいつらは自分じゃ動けないだろう」

なるほど。

「思いつきり騎士をパシつてる気がするんだが、……」

気にしない方が良いぞ、タクヤ。

「ほり、早く2人を抱えなさいよ。私一人じゃ無理なんだから  
はいはい。

ここは街門。2人の姉のルディさんが待つっていた。

「お姉ちゃん、御免なさい！」

「薬草、お母さんの病氣が治るかなって、うれい、でも見つかんなくつて……」

「そう……。それなら、冒険者さんに頼んだのに。むづくめくはずだつたのよ？」

「ん？ まさか……。

「もしかして、ハリヘネ草を頼んだのは、貴方ですか……？」  
「え？ あつ、貴方達が引き受けてくれたんですね！ 有難うござります、勇者様」

は  
い  
?

## 第1-2章（前書き）

すみません、投稿遅れました。

「「「勇者様あ！？」」「

それはないぞ、ルディさん。

「あり得ないわよ、カケルが勇者なんて」

「冗談うまいなあ」

何か灼に触るが、本当だから仕方ない。

「え？ でも、『ゼウス』を懲らしめて戴けたんでしょう？」

あれは偶然だ、うん。

「仕方なくよ」

そうそう。

「グレー・テルとヘンゼルを見つけて来て下さいましたし  
いや、あの状況で無視するとか絶対無理だから助けただけなんだ  
が。

「お兄ちゃん達、すごいんだよ！」

「変な奴を倒して、帽子も取り返してくれたんだ！」

「ほら、2人もこいつ言っていますし、薬草も取ってきて頂けたじや  
ないですか」

何か変な方向になつてないか、おい。

「取りあえず、カケルは勇者じゃない…と思つぞ」

「そこは断言してくれ、タクヤ。

「いや、有り得るかもしねないだろ？」

何故。勇者って言つたら、こう街に攻めて来た魔物の大軍を追つ  
払つとか、そういうのじゃないか？

「あら、魔物の大軍と戦いたいの？ 物好きね。何だつたら秘境の  
場所を教えてあげるわよ？」

遠慮する。何で自分から勇者になりに行かないといけないんだ。

大体そんな所に行つたら死ぬだろ。

「大丈夫じゃない？ カケルとコーノだし」

「そうかもしけんが、カケル、俺としては止めた方が良いと思つぞ  
あのな、俺は行くとは一言も言つてないからな？」

「それにだな。俺はさつさと元の世界に戻りたいんだが」

「そう？ 私としては戻つても誰かが私の事覚えてるかどうかも分  
からないし、こっちの方が問題は有るけど、まだ過ごし易いから帰  
らなくともいいんだけど」

確かにミーナが消えたのに俺達が覚えていなかつた事を踏まえる

と、俺達も忘れられてるかも知れんが……って、思い出したのか？

「そうだけど、言つてなかつた？」

「そういえば俺も思い出してるが、言つてないのか？」

「聞いてねーよ。つーか、お前等から聞かないと俺が知つてゐるわけ  
無いだろうが。

「そうか、すまなかつたな。まあ、思い出してるのはいつてもカケ  
ルとほぼ同じだろ、主觀が違うだけで」

「そうなんだがな。

「でも：私、消えた時の事覚えてないわよ？」

「そうなのか？ 僕も人の事は言えないと」

「家で昼寝したのが最後だと思うわ」

「確かあの日は日曜だつたよな。俺達みたいにサボつたつて訳じや  
ないのか。

ふーむ。

「それは兎も角、」ヒから早く離れましょ！」  
何でだ？

「まひ、じに居たら注田浴びちゃう。また勇者に祭り上げられ  
るの嫌でしょ？」

それはまあ、そつだが。

「じゃあ早く行きましょ、早く早く早く」

……何かあったのか？ あからさまに挙動不審なんだが。

「べ、別につ？ そつそれより、行かなきや」

いやそれで不思議に思わない方がおかしいだろ。

「ああもう、そんな事は良いのつ！ あんた達だって、ストーカー  
とか護衛とか貴族とかそれ全部纏めた様な奴らの相手したくはない  
でしょ！？」

何かよく解らんが、とつもなく面倒臭そつだといつ事は云わっ  
た。

「じゃあとりあえず、何処か行こうぜ。ミーナちゃんが何を嫌が  
つてゐるのか分からぬし聞く氣も無いが、俺はもう疲れたぞ」  
それには同感だ。さすがに色々 薬草採取とか行方不明とか山  
賊とか記憶とか ありすぎたからな。

「じゃあ、家であたしが覚えてる限りの料理作つてあげるから！  
そうね、50品ぐらいで良い？」

多すぎだつて。幾ら俺とタクヤでもそれは無理なんじゃないか？

「いけるんじゃない？」

「右に同じく。カケル、食べるぞー。」  
マジか……？

## 第1-2章（後書き）

評価して下さった方やお気に入り登録して下さった方には  
大変申し訳ないのですが、もしかしたら次の投稿は  
かなり遅れるかもしれません……。お詫び申し上げます。

関係ありませんが、「少年陰陽師」の  
2次創作を書き始めましたので、よかつたらどうぞ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3384w/>

平凡勇者の異世界冒険記

2011年11月27日16時55分発行